

『煌夜祭』特別書き下ろし短篇

「赤い炎」

多崎 礼

この話を聞いたのは、もう十年近く前になる。

先王ゼルが倒されて、代わりにイエシン王が立って、一年ほどが経った頃だった。一人の男が私の家を訪ねてきた。

「断っておくが、私は魔物ではない」

彼は真顔で切り出した。

「なのに私には、私のものではない記憶がある」

そして、男は話し始めた。



私はカルオスの農家に生まれた。四代前は貴族だったというが、その面影はまったくなかった。私は両親とともに畑に出て、野良仕事を手伝いながら育った。近所の農家は皆、子沢山だったので、遊び仲間は大勢いた。でも私は鈍臭い子供だったから、よく仲間達から置いていかれた。

その日、薪を拾いに行った帰り道、急ぐ仲間達についていかれず、私は一人、森の中に残り残されてしまった。ようやく森を抜けたと思ったら、今度は転んで膝を擦りむいてしまった。

日は暮れるし痛いし心細いしで、私がメソメソ泣いていると、

「大丈夫？」

通りかかった女性が声をかけてくれた。

「たいした怪我じゃなくてよかったわ」

と傷の手当てをしてくれた。

彼女の髪は黒く、瞳は紫紺色だった。肌は透き通るほど白く、唇は可憐な花弁のようだった。でも一番印象的だったのは真っ赤な花、リコリスの仮面だった。それは燃え盛る火炎、すべてを焼き尽くさんとする情念の炎を思わせた。

まさにその時、思い出したのだ。

前にも同じようなことがあった。膝を擦りむいて、痛くて怖くて心細くて泣きそうになっていたら、美しい女性がやって来て、傷の手当てをしてくれた。

黒い髪と紫紺の瞳。はるか年上だったにも関わらず、私は一目で恋に落ちた。

「軟膏が乾いて自然に布が剥がれるまで、このままにしておいてね」

そう言って、立ち去ろうとする彼女に、私はつい問いかけてしまった。

「あの、お名前を……」

「語り部に名前を聞いては駄目よ」

微笑んで、彼女は自分の仮面を指さした。

「私は『赤い炎』」

透き通るような美貌に不似合いな、苛烈な通り名だと思った。

次に彼女に会ったのは、その数年後。

夕暮れにカルオス城へと向かう花嫁行列を見かけた。真昼ではなく日の入りの時刻に入城するのは、正妃ではないからだと思っただと後に知った。

「別嬪さんのにねえ」

「まだ若いのにねえ」

花嫁衣装を纏っているのは黒い髪に紫紺の瞳をした美しい女性だった。仮面はつけていなかったけれど『赤い炎』に間違いなかった。

「後宮に入れられるんだって」

「かわいそうにねえ」

またもや私の脳裏に私の知らない記憶が蘇った。

鉄柵の向こうに立つ女性。傷跡だらけの両手。

彼女を守りたい。彼女を救いたい。

狂おしいまでの思慕に突き動かされ、私は花嫁行列に突進した。衛兵に制止されたが、かまわずに叫んだ。

「私は王になる。王になって貴方を迎えに行く。待っていてくれ。必ず迎えに行くから」

『赤い炎』は唇の動きだけで

《待っています》

と答えた。

彼女を後宮から救い出す。

そのために私は勉強に励んだ。必死に体を鍛えた。

ゼル王の治世に不満を抱く仲間を集め、ついに行動を起こした。

カルロス城は炎上した。城内から火の手が上がったのだ。ゼル軍勢を倒し、駆けつけた時にはもう後宮は炎に包まれていた。

目の前が真っ暗になった。

間に合わなかった！

また間に合わなかった！

胸が引き裂かれるような悲しみ。去来する虚しさ。鮮烈に蘇る、私のものではない記憶。

落ちていく女。届かない指先。白い屋根の上に落ちた彼女は真っ赤な花のように見えた。

私はまたしても愛する女性を失った。

しかし、焼け落ちた城から『赤い炎』の遺体は見つからなかった。

この世には『魔物』と呼ばれるものがある。総じて美しい外見を持つが、一年に一度、冬至の夜に恐ろしい怪物と化して人を食べる。だが物語を食べている間は人の姿を保っていられる。ゆえに魔物は冬至の夜、語り部として焔夜祭に現れるという。

一縷の望みにすぎり、私は焔夜祭を開くことにした。『赤い炎』は語り部だ。もし生きていたならば、彼女はやってくるはずだ。

冬至の夜、久しぶりの焔夜祭とあって、大勢の語り部が集まった。

その中にリコリスの仮面はなかった。覚悟はしていたが失望は深かった。語り部達が語る奇妙で興味深い物語の数々も、私の心を慰めてはくれなかった。

夜半を過ぎた頃だった。遅れて一人の語り部が現れた。

燃える炎のようなリコリスの仮面。『赤い炎』だった。

生きていてくれた！

会いに来てくれた！

それだけで私は胸がいっぱいになった。

火壇にイガ粉を投げ込んで、彼女は滔々と語った。もつとも長く、もつとも語るのが難しいとされる物語……『王位継承戦争』を。

そして最後に私を見て、こう言った。

「私が望むのは、この国の民を王政と恐怖から解放してくれる新しい王。エン・ハス・イブーとクォルン・ゼンが夢見た世界を実現させてくれる新しい王です」

私は感極まって、思わず尋ねてしまった。

「では、その夢をかなえたら、私と結婚してくれますか？」

話し終えて、その男は言った。

「貴方は多くの物語を記憶している。ゆえに貴方の意見が聞きたい。『赤い炎』を好きになったのは私なのだろうか？ それとももう一人の私……前世の私なのだろうか？」

それに対し、私は応えた。

「さまざまな経験、さまざまな物語を食べて、私達は自分というものを作り出す。もし前世があるとして、それを思い出すことが出来たとしても、その記憶はすでに貴方の一部だ。貴方が悩むべきはそこではなく、どうやって夢をかなえるか、ではないのか？」

実を言うと……

この話はしないようにと、彼から口止めされていたんだ。

「夢をかなえるまでは話さないでくれ」とね。

それを、なぜ今になって話したのか。

知っての通り、今年イエシン王が結婚した。王都エルラドで催された盛大な結婚式のことは、皆も聞いているだろう。

そのお相手が、どうにも気になってね。

エルラドまで、こっそり見に行ったんだ。

ああ、本当に聞いていた通りだった。

イエシン王の花嫁は黒髪に紫紺色の瞳をした、とても美しい女性だったよ。

